魔法のプロジェクト 活動報告書

報告者氏名：澤岻 圭祐　　所属：大平特別支援学校　　記録日：2023 年 2月 27日

キーワード：不登校支援、進路指導

【対象児の情報】

・学年 高等部３年生

・障害名

知的障害、精神障害

・障害と困難の内容

知的な遅れはそれほど感じない。しかしながら、小・中学校時代には不登校があり、そのことが原因での学習遅滞を感じることはある。本校入学後も学校に通学できないことがあり、その傾向は現在も続いている。昨年度まで就業体験実習にもほとんど参加することができず、進路決定に向けての取り組みにも遅れが出ている。

【活動目的】

・当初のねらい

①卒業後や今年度の生徒自身の目標や希望を具体的にする

②生活習慣の確立

③生活に根ざした学力の定着

④学校や支援者とのつながりの形成

・実施期間

令和３年４月～令和５年２月

・実施者

澤岻　圭祐

・実施者と対象児の関係

令和３年度：担任、令和４年度：教科担当

【活動内容と対象児の変化】

<u>対象児の事前の状況</u>

・高等部から本校へ入学。

・知的な遅れはそれほど感じない。しかしながら、小・中学校時代には不登校があり、そのことが原因での学習遅滞を感じることはある。

・昨年度（高等部１年時）にも学校に通学できないことがあり、現在もその傾向は続いている。

・ゲームや YouTube 等を見て過ごすことが多く、不規則な生活になることも多い。

・緊張したり、「登校しなければ」と思う場合などは夜眠れないこともある。

・卒業後の進路希望や見通しについては未定。

・昨年度はオンラインでの学習補償等はあまり行うことができていなかった。

・一学年上に姉がおり、対象生徒と同じように不登校傾向である。現在は姉の担任とともにオンラインでの学習等を取り組み始めている。

活動の具体的内容

・オンラインでの学習

沖縄県の新型コロナウイルス感染者数の増加によって、６月から分散登校や休校等が続いている中で学校へ登校できていない状況が続いている。そのため、６月から保護者と連携しながらオンラインでの学習に取り組んでいるが、体調等によって実施状況は数回程度である。内容についてはマイクロビット等を活用したプログラミングやネット教材を活用したタイピング練習等が中心である（図１，２）。

図１．オンライン授業の様子（micro;bit でのプログラミング）

図２．オンライン授業の様子（タイピングゲーム）

・遊びを活かした学習

図３．ミニ四駆を題材に学ぶ様子（レース後に車体を比較）

普段の学習に対してのモチベーションがあまり高くないため、「遊びを題材にした学び」をと考え放課後に取り組んだ。対象生徒はプラモデルを作るのが好きだということで、「ミニ四駆」を題材に取り組んだ。ミニ四駆を選んだ理由は、組み立てるだけで終わらずにモーターや電池等の性質を比較しながら実験をするように取り組めると考え題材とした。また、対象生徒だけでなく、仲の良いクラスメイトと競争をしながら車体のスピードの違い等について学習を行った。「電池を変えたらどうなるか？」「モーターは？」等を試行しながら取り組みを進めた（図３）。

・Pepper 等を活用した役割作り

給食週間や月に一回の「琉球料理の日」等での Pepper やポスター作りを行った。この取り組みについても他のクラスメイトとともに行い、オンラインも併用しながらメール等の活用をしながら取り組みを行った（図４）。クラスメイトと談笑しながら取り組むことで、プログラミングや文書作成を１～２時間取り組むことができた。

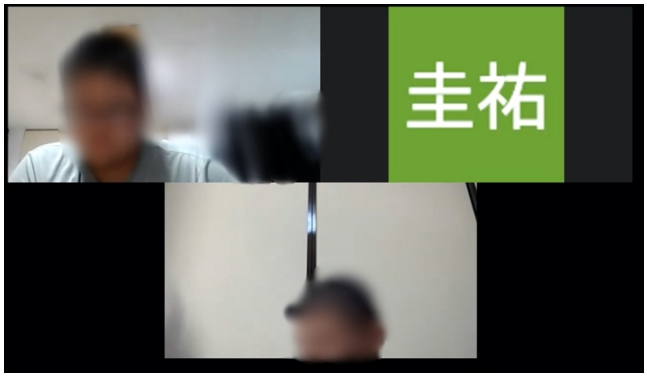

図４．オンライン授業の様子
（話し合いをしながらプログラミングを行う）

・保護者との連携

Microsoft Teams を活用しながら担任と保護者との連携ができるようになっており、生徒の興味関心や家庭での様子等についても教えてくれるようになっている。また、家庭で生徒が「ドーナツを作りたい」など、学習に活かせるような活動を行うこともある。

・オンラインでの就業体験

昨年度は就業体験実習にほとんど参加することができなかった。そこで、今年度の前期実習では遠隔での就業体験を実施した。これまでに経験した Zoom でのやりとりやメールでのやり取り等も行いながら参加することができた。

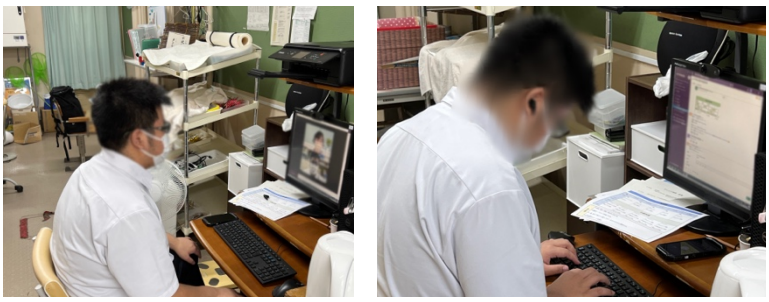

図５．実習の様子
（左：Zoom でのミーティング、右：進捗状況の報告）

・対象児の事後の変化

昨年度当初はオンラインについても生活リズムが整わないことも多く、取り組むことが困難なことも多かった。しかしながら、保護者や他教師と連携をすることで少しずつ回数を増やすことができるようになっている。その際に、教師とのマンツーマンでの取り組みではなく、友人も一緒に行ったことで雑談をしながら取り組むことができるようになっている。また、普段の授業でも Zoom や個別や小集団で学んだことを活かしながら集団での活動に参加することができるようになっている。

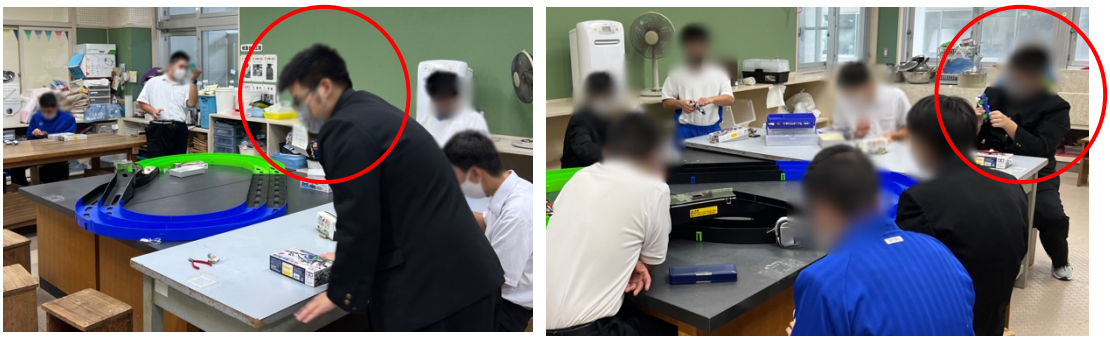

図６．授業での様子
（理科：電気の単元の学習）

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

① 卒業後や今年度の生徒自身の目標や希望を具体的にする。

→卒業後に向けて、就業体験実習や夏休み等に行なった抽出実習ではほとんど休まずに参加することができるようになっている。また、卒業後の進路先についても自分自身の意見を持ち、選択することができ

た。

② 生活習慣の確立

→まだまだ生活週間の確立には至っていないが、実習等での遅刻や欠席は少なくなっており本人の意識や興味関心等に即したものであれば参加することができるようになっている。

③ 生活に根ざした学力の定着

→家庭でも母親と一緒に料理を作ったり、PC のタイピング練習をしている様子が少しずつ見られるようになっている。また、これまでに学習した内容を活かして実習等に参加することができた。

④ 学校や支援者とのつながりの形成

→保護者と Microsoft Teams で連絡をこまめに取りながら生徒の体調の確認や学校行事の確認、課題等の連絡を共有することができるようになっている。

今回の実践は、前年度からの継続の取り組みである。前年度はオンライン及び「遊びを通しての学び」が中心であった。生徒自身が友人との関わりを楽しむことができた反面、生活や進路等との関連をかんじることができなかったことが課題であった。それに対して今年度は進路という高等部３年生にとっては重要な問題であったために生徒自身も就業体験実習などでの出席状況の向上につながっていると考えられる。

・エビデンス（具体的数値など）

今回の取り組みにおいて、出席状況等に大きな改善は見られない。ただし、就業体験実習は昨年度までほとんど参加できなかったが、今年度は抽出実習も含めほとんど休まずに参加することができた。また、これまでに取り組んだ Zoom を活用したオンラインでの学習やタイピング、文書作成などの取り組みにより実習へのハードルを下げることができたのも大きな要因であると考えられる。これらは生徒本人からも「今まで経験した（やった）ことがあるのでやりやすい」などの感想や実習先からの評価が高かったことにも表れている。今後、残り少ない期間で通勤等移動の問題などスムーズに移行していけるように取り組んでいく予定である。